

賢治が訪問した頃の緯度観測所

—当時の記録映像(1921～'23年ころ)に見る—

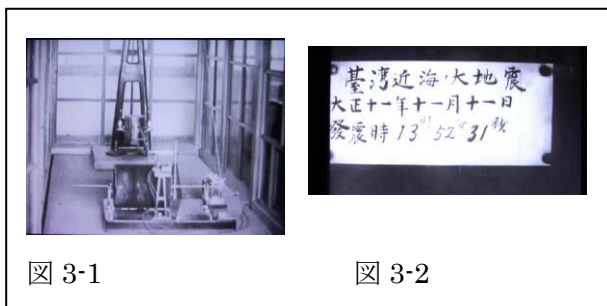
1) 1922年～1923年の頃の水沢の緯度観測所本館(1921年新設)。正門から覗く庭木が若いことから新築後間もないことが推定される。



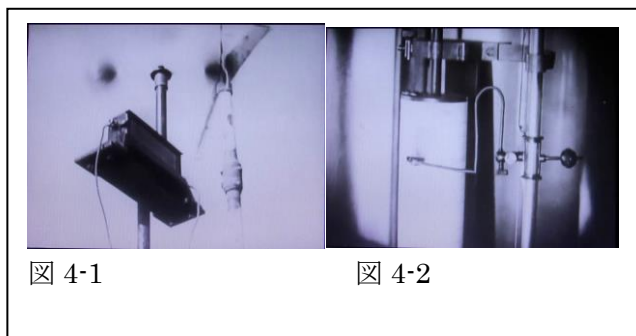
2) 本館には右(西)側に初期の研究棟(平屋建)が続く。その右背後に高い塔が見えるが、これは気象観測塔で、風力計と風向計が取り付けられていた。また塔の上から上空の風を測るために風船などが飛ばされた。



3) 地動計室があり大森式地震計(図 3-1)が 1901年に設置されて観測が続けられていた。緯度変化に及ぼす地震の影響を調査するためであった。この装置による大正 11 年 11 月の台湾近海地震の記録もなされている(図 3-2)。



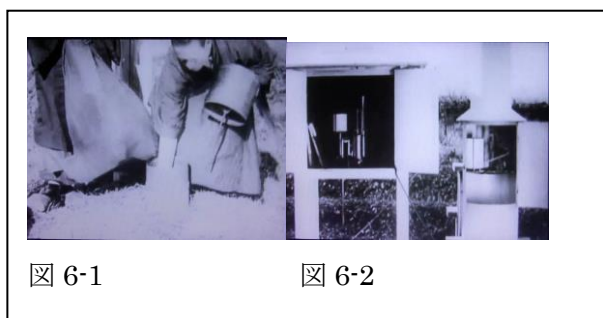
4) こちらは気象観測の装置である風向計と風力計の測定部(図 4-1)と記録部(図 4-2)



5) 本館内の庶務会計課で作業するスタッフのようす。事務会計、国内外の関係機関との通信事務の心臓部の役割を務めた。



6) 眼視天頂儀室の約 15メートル北に設けられた気象観測露場で雨量計、地中温度(図 6-1)などを計測する担当者。百葉箱(図 6-2)が設けられ毎日の気温、最高・最低温度、気圧、湿度などもここで記録が取られていた。



7) 当時の緯度観測の主力装置である眼視天頂儀。本館から南西部に約 100 メータ行ったところに観測室があり、天頂付近の星を使って夜間 4 時間の本観測と随時の調整のための観測が行われていた。操作しているのは、初代緯度観測所長の木村栄博士。写真としては珍しい資料である。

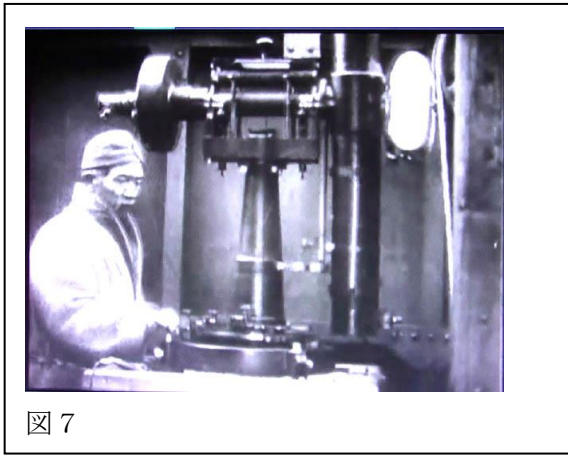


図 7

8) 気象観測塔の上から見た観測所の南側の様子。長く続く道の突き当たった所に見える建物は子午儀室。中に子午儀が設置されており、夜間屋根が開かれて星が南北線を通る時刻と天頂からの距離が測られた。また右手前から斜めに走る通路は眼視天頂儀室に向かうもので、画面では切れているがその先20メートルほどの所に観測室があった。



図 8

子午儀室の手前左側に見える円形の柵は「雲量計」または「測雲器」と呼ばれるもので、円形の中心に高さ5メートル程の棹がたてられており、その先端に櫛の歯状に横線が取り付けられており、下から人の操作で回転できる構造になっていた。この装置は上空を経過する雲の量とその流れの方向を測るものであった。円形の柵は36本の杭から成っており、方位を決める目印にされていた。

この1、2年後に宮沢賢治が緯度観測所を訪れた時に、書き残した詩「晴天恣意」(1924年3月25日)に、自分がこの雲量計の下に立ち昼の空を見上げ、今あの大切と思う連星が雲量計の横線をきって過ぎて行こうとしている、とその体験の様子を描いている。賢治にとってもモニュメントとなった装置である。

9) 2つの建物は手前から工作室、電池室(図9-1)、

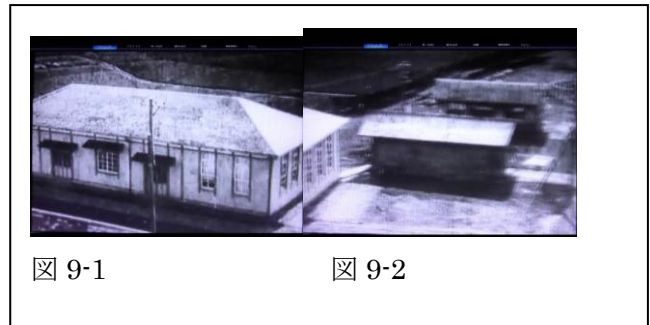


図 9-1

図 9-2

そして左手手前は実験室兼印刷室(図9-2)である。

10) 気象観測塔の上から南西から西にかけて見える光景。ほとんどが田畑であるが、電柱の並びや近くの農家のたたずまいが見える。

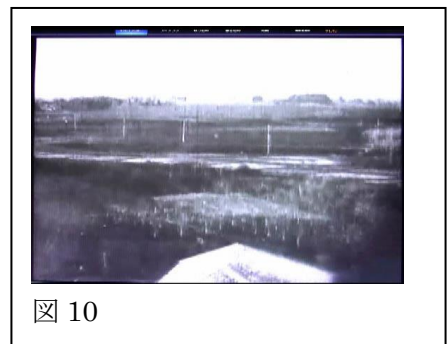


図 10

11) 北東の本館正門前の民家の様子



図 11

12) 同じく塔の上から見た本館の屋根(図12-1)、その南のテニスコートとその東側の職員官舎と合宿所(図12-2)など。

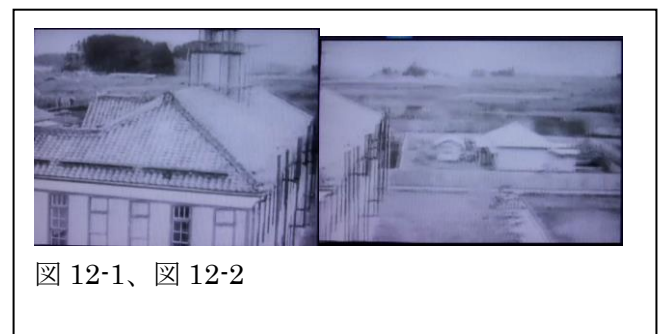


図 12-1、図 12-2

(画像は当時記録の石川チカ氏提供の Movie Filmによる。)